

第八話 江戸川柳と下水

栗田 彰

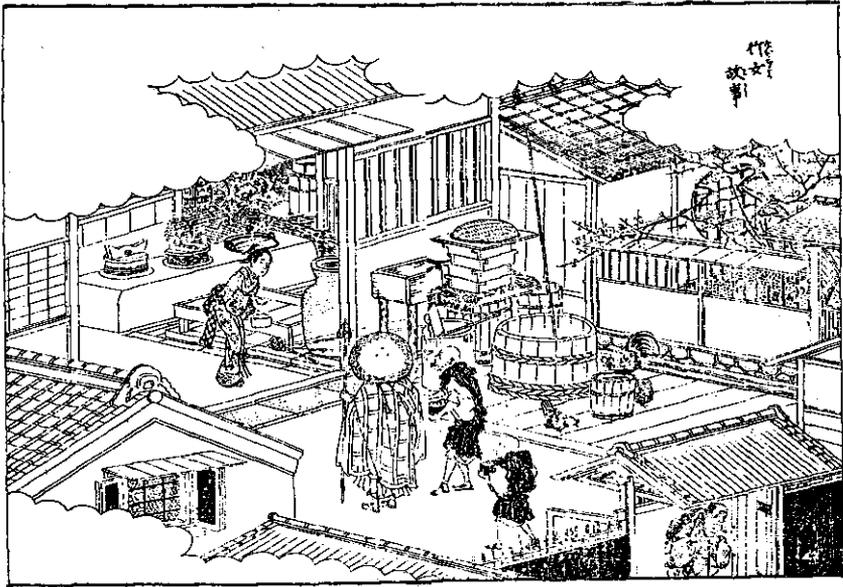
はじめに

私はずっと文芸には興味を持っていましたが、専門家ではありません。最近通勤時間が長くなった関係もありまして電車の中で岩波文庫の川柳の本『俳風柳多留』等を読むのを楽しみにしてまいりました。最初は川柳に出てくる江戸の街の地名を拾い出して興じていたのですが、中には下水を扱ったものもあるんです。それでついつい興味が湧きまして、下水にちなむ川柳を拾い出してみたんです。そしてそれらの川柳からかつての江戸の街や下水道の様子を考えてみました。ここで取り上げた川柳の解釈は、『江戸川柳辞典』（東京堂出版）と『川柳大辞典（上下）』（高橋書店）に拠っております。辞典に載っていないものは私の勝手に解釈です。しかし、私は川柳の解釈に重きを置いているのでなく、川柳の中に出てくる言葉を基に、江戸の街の下水道がどのようなものだったか

を探ることなんです。それでは本題に入りましょう。

流し

先ず最初は「女房が留守で流しに椀だらけ」という句です。この句の中の「流し」、これが下水の始まりということと拾い出しました。私が読んだ川柳の本はほとんどが岩波文庫なんです。引用文献一覧（一五七頁参照）を御覧下さい。これらの本の中で、「流し」という言葉が入ったのは、この句だけでした。解釈は、「女房が留守にすると亭主は不精なものだから後片付けもせず流しに椀が溢れている」ということだと思えます。ここから類推出来ることは、長屋等では井戸端で洗いのをしていたと思っていたのですが、実は井戸端は洗濯の場所、炊事等はそれぞれの家庭でやっていたということとです。深川の江戸資料館で家の中の様子を見ますと、だいたいの家にも台所に流しがあります。流しにも二種類ありまし



図一 台所に流し台

た。立って仕事をする流しと板の間に座って流しを使う形式のもの。図一を御覧下さい。この図は江戸名所図会に載っていたものです。「竹女故事」となっていますが、お竹如来、大伝馬町だったか馬喰町だったかの商家の女中さんが大日如来の化身であったという伝説のようなものがありますが、その項目を説明した絵に流しが描かれています。左の女性の側ですね。

小さい溝

さて、次は溝（どぶ）です。街の中の大きな溝と違っています。家の前の小さい溝です。家の前に小さい溝が流れていたのではないか。

「溝へ手を入れてかっぱを下女さがし」

「かっぱ」とはキュウリのことだそうです。単純に考えると、洗っていたキュウリを溝にうっかりながしてしまっただけで探しているということなんです。でもよく考えるとなかなか面白い意味が隠されているようにも思えます。

さて次は「二つ三つ鳴らして座頭どぶをこし」です。「鳴らす」というのは、怒鳴り散らすということだそうです。昔は座頭、つまり按摩さんが金貸しをしていたりして、借金を取り立てる時に家の前で大きな声で怒鳴って、それから家の中に入っていったことらしいんです。この川柳からも家

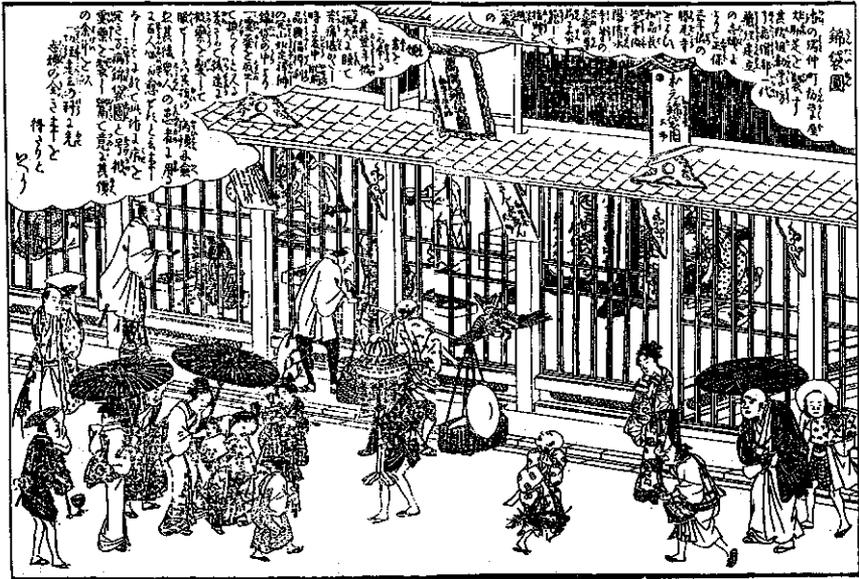


図-2 家の前の溝

の前には溝があったことが類推出来るのではないのでしょうか。次ですが、『三輪の神どぶを跨ぐとだまをやり』

「だまをやり」というのは風の糸をたぐるといふことらしいです。この川柳は江戸の街のことではなく、奈良の三輪山です。伝説に三輪の神が里の女性の所に通ってきて相手が分からないというので神様の袖に糸を付けておいて、帰っていった所を探し出したというのがあります。袖から糸が引かれていたのでちょうど風を上げるようになったということなんでしょう。この川柳にも「どぶを跨ぐ」という部分があります。やはり家の前に溝があったことが分かります。図一二は、江戸名所図会の中の錦袋園という絵です。現在の不忍池の少し南側に仲町商店街というのがありますが、そこにこの絵にある薬屋さんがあったそうです。この図には家の軒先の下に溝が描かれています。

溝について「守貞漫稿」に家の溝の様子を描いた図があります。その説明に「どぶと言う。江戸では下水」と書いてありました。京都・大阪で「どぶ」と言っていたものを江戸では「下水」と言っていたのでしょう。しかし江戸語辞典（講談社学術文庫）には「下水」という言葉は出てきません。ところが「どぶ」は載っているんです。それには「みぞ、下水、汚泥のあるみぞ」という説明がされていて、その例として先程の座頭の川柳、さらに「どぶのうちのかわず大海を

知らず、「どぶへ落ちたコンペイ糖」、これは醜い顔のことをこのように形容するようです。さらに「どぶを食う」ということ、これは後で説明する川柳にも出てくるのですが、意味が分からないと書いてあります。「どぶ板」、人を罵って言うとき「どぶ板野郎」なんて言います。それから「どぶ川」、以上のような言葉が並べられていました。だから、江戸でも下水のことを「どぶ」と言っていたのでしよう。私は江戸も関西と同じように言っていたのではないかと思います。

雨落

溝の次は「雨落」です。「雨落を掘り掘り下女が宿」軒先には雨落下水が造られていた。宿というのには下女を送り込んだ方の宿元、身請け保証人みたいなものなんです。川柳や江戸の小唄では下女というのは大麥好色ということになっていて、子供ができたりする。すると宿元が来て誰が相手だとか、いろいろな相談に乗ってやる。あまりおっぴらに出来る話ではないので、軒先なんかにはしゃがみこんで、どぶでも掘りながらそんな話をしている。この川柳は、そんな光景を描写しているのではないのでしょうか。

「雨落へ捨てろはけちな月見なり」

月見をしながら、普通なら団子などを食べるのでしようが、ここでは枝豆を食っては、ぼいぼいと残った鞘を軒先の溝に

捨てている。これから想像するのに、雨落は家の前だけでなく、家の周りにも巡らされていたようです。

溝板

次の句は、「薬研堀どぶ板造が一度なり」

「薬研堀」は、現在の両国橋の西側、浜町によった所、あの辺りの地名です。ここにいう「薬研堀」は薬研堀不動のことだそうです。「どぶ板造が一度なり」は、お百度を踏む一回分がどぶ板からお不動さんの前までということ。つまりどぶは境目、つまり道路と境内の境にあつた。しかもそのどぶには板の蓋がされていたということが類推できます。

大きい溝

さて、今度は街の中の大きい溝（どぶ）です。

「据風呂の仕舞ひとぶから湯気が立ち」

普通江戸では自分の家で風呂をたくことは禁じられていたようです。大体銭湯を使っていたようです。中には大きい商家だとか、武家屋敷等では風呂場も持っていた。銭湯は夕暮れ頃までが営業時間だったようですね。終い風呂になると、湯を抜いて街の中の溝から湯気が立っていたということではないか。そんなように思います。

「甘酒進上と大ぼやどぶへ落ち」



図-3 町の溝 (江戸小咄「金ひろい」のさし絵)

「大ばや」というのは、なりは大きくなってもまだ子供と
いった人のことでしょうか。そんな大ばやが小さな子供を甘
酒進上と言いながらあやしている内に自分がどぶにおっこち
てしまった。この川柳はそんな意味だと思います。

『まます事はどぶへ入った子がお客』

この川柳でも先程の川柳でもかなり大きな溝があったこと
を想像させますね。なにしろ人が落ち込んだりするんですか
ら。この川柳では溝の中の方が位置が低いので、他所の家に
上がるのに低い所から高い所に上がる、そんな風になる。そ
こでどぶの中の子がお客。まあ、そんなところでしょう。

『生酔にどぶを教えてしかられる』

酔っ払いにどぶがありますよと教えたら、「うるせえ、酔っ
ちやいねえやい」とかられまたということでしょう。

『生酔はどぶで抜手を切っている』

どぶへ落ちて、横になって溺れているというのはおかしい
のですが、ばちやばちややっている状態を「抜手を切ってい
る」と表現したのではないかと思えます。図一三ですが、こ
れは小喃の挿絵です。この喃は「お金を拾うとみんな喜んで
るが、そんなに面白いものかと、ある男が自分のお金を撒
いてみて拾ってみたけれど、さっぱり面白くない。それでも
少し遠くへ撒いてみようかとやってみたら溝へ落ちてしまった。
それで溝に入って一生懸命探して見付かった。「あー良かつ

た、やつぱり嬉しい」といった喃なんです。その小喃の挿絵
です。随分大きい、川のような溝ですね。

『夷講百万両がどぶへ落ち』

昔、江戸時代ですが、大きい商家では夷祭を十月二十日に
やったようです。紙で偽の小判を作って、それを使って鯛の
競り売りなんかをやつて景気を付けていた。その祭の賑わい
の中で「百万両」なんて言った酔っ払いが溝へおっこちた。
そんな雰囲気を写した川柳でしょうね。

『放れ馬どぶから旦那首を出し』

繋いでいた馬が綱を切つて暴れだした。その馬を避けよう
として溝に落ちた旦那が首を出して様子を見ている、そんな
情景です。

『放れ馬どぶから座頭あげてやり』

やはり同じように避けようとして溝に落ちた座頭を上げて
やっているということですね。

『馬子の新米どぶへたれて居る』

馬子というのは馬を引きながら小便したものらしいですね。
それが出来ない馬子はまだ新米。そんなことを言っているよ
うです。

『どぶへたれたで馬方は安く見へ』

これは新米と見られたか、それともその馬子が包茎で若い
と見られたか。川柳秘語辞典（樽椽社）などは後のように解

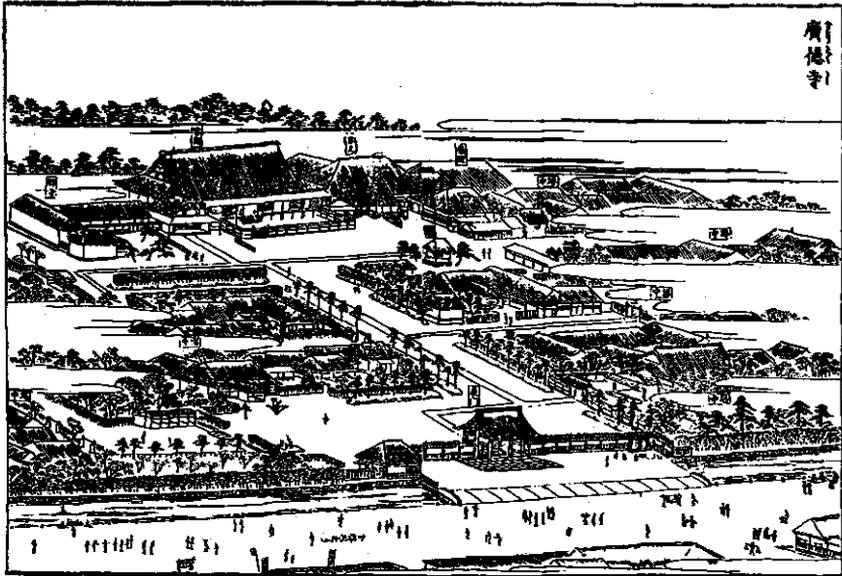


図-4 下谷広徳寺前の溝

釈しています。秘語辞典には類句として「越前だそうであの馬子どぶへたれ」というのが載っています。越前は包茎の意味なんです。

『小気味よく大家が落ちて溝普請』

何しろ人が落ちたりしているのですから、大きい溝には蓋がされていなかったと思えるのですが、この句等を読むと、場所によっては蓋もあつたのかなと思えてきます。道路を横切る所には板あるいは石で蓋がされていた。橋というほど大袈裟なものではないが、板の蓋が腐っていて大家さんが落ちた、それでようやく大家さんが直し始めた。そんなことを少々皮肉っているのじゃないかと思えます。

『どふいふ門だ広徳寺のどぶへ下戸』

「どふいふ門だ」というのは洒落で、「どういふもんだ、広徳寺の門」と言うような言い方がよくされていたようです。広徳寺は、今の台東区役所のある所にあつた大変大きいお寺で、その門が大工さんの寸法違いで少し寸足らずになった。それで有名になった門のようです。江戸名所図会に広徳寺が出ています。図一四がそれで、門の前に川に近いような溝があります。酔っ払いもしない下戸が溝に落ちるといふのはどういふモンだ?というところ、広徳寺の門という、こんな洒落です。

お齒黒どぶ

さて、次ぎは新吉原のお齒黒どぶにちなむ川柳。

『恋の盗みは大どぶをこへるなり』

駆け落ちですね、遊女が男と一緒に溝を越えて逃げて行くということですね。

『大どぶの向こうに残す上草履』

妓楼の中では上草履をはいていたのでしようが、それが溝の縁に残っていて、うまく逃げたということでしょう。

『どぶを越したは四郎兵衛落度無し』

『四郎兵衛』というのは大門の脇にある番屋の番人です。

この番屋を越して逃げたのなら番人の責任、ところが溝を越したのだから責任はないということですよ。

『良い男どぶから女房つれて来る』

これもうまく引つ張り出して女房にしたということですよ。

『大どぶで拔手を切った女房なり』

これも溝を越えて逃げてきた女性を女房にしたいということですね。

『お齒黒どぶ』は遊女の逃亡を防ぐために遊廓の周りに掘った堀りです。明暦三年の大火（一六五七年）の頃、今の日本橋人形町の辺りから浅草の方に移ったんですが、その直後の寛文年間、一六六一年頃、溝幅五間。ところが幕末には二間

位。随分狭くなったんです。明治以降は三尺位。そして遂に大正の大震災の時に埋め立てられてしまいました。

割下水

さて、次は『割下水』。本所割下水です。南割下水と北割下水というのがありました。単に『割下水』というとなの方を差して下水というよりその近辺の地名の俗称として使われていたようです。

『黙礼の向うへ届く割下水』

『黙礼の中を流るる割下水』

本所近辺には旗本屋敷等があったので、親しい旗本同士の間接の光景を写したものでしょう。割下水の幅は、ある本では九尺とあります。二間と書いたものもあります。これが道路の真ん中を流っていたので、割下水と言われたのです。長さは約一五町、今の一・五キロメートル位でしょうか。

『割下水通り夜中に逃げる音』

吉良邸へ赤穂浪士が討ち入り、吉良の家臣が逃げて行った。そんな事を詠んだ句でしょう。

『井出よりも蛙の多い割下水』

井出というのは現在の京都府井出町。宇治の少し北側です。蛙が沢山いた所らしいです。全国に有名な玉川が六つあって、『六玉川』といわれていますが、そのうちの一つが流れて

いた所らしいです。井出の玉川という。そこより割下水の方
が蛙が多いということなんです。蛙が多いというんですから
割下水の水はそんなに汚れていなかったんでしょう。

「先箱で出る助六は割下水」

助六は歌舞伎で有名な花川戸の助六ですね。助六の紋と律
軽侯の紋とが同じだったらしいです。それでこの句の助六は
津軽侯を意味している。助六は蛇目傘をさし、尺八を持って
舞台に出て来ます、それを先箱で出るというので、それは津
軽侯だ。そしてその屋敷が本所にあった、そういうことを言っ
ているんです。

どぶ店

その次が「どぶ店」です。これも俗称地名です。どうして
その場所がどぶ店と言われるようになったのか、その由来は
分かりません。場所としては現在の台東区元浅草、上野から
浅草へ行く通りの南側、その辺りを「どぶだな」と言ってい
たようです。昔からお寺さんが並んでいます。

「どぶ店で蚊の啼くように経をよみ」

小さい声でお経を読んでいたのを、溝だから蚊が出たろう、
というのでこのような川柳が出来たのでしょう。

「妻は家賃の安いどぶ店」

どぶ店なんて名前前から住み手が無くて家賃が安かったのか

なと思います。

「どぶ店の囲ひあひるで見た女」

囲ひ女、お妾さんですが、お寺さんのお妾さんを特にこの
ように言っていたようです。「あひる」は深川の佃新地という
所にあつた私娼窟です。その私娼窟にいた女がお寺さんの妾
になつていたということでしょう。

「池と堀どぶへも咲いた蓮華草」

「池」は池上本門寺、「堀」は堀の内妙法寺です。そして「ど
ぶ」は俗に「どぶ店」と言われていた新寺町の長遠寺です。
いずれも日蓮宗の大きいお寺です。それと蓮華草は日蓮宗を
指しているのだそうです。下水に直接関係があるかどうか分
からないのですが、「どぶ店」という名称があつたので拾い出
してみました。江戸文学地名辞典には「どぶ店」に土が富む
という字を使っているんです。川柳大辞典には瀬という字を
どぶに当てます。「字源」を引いてみますと、この字は「コン」
と読み、濁る、乱れる、汚れるといった意味だとあります。
例語に「瀬軒」、これは厠のこと。「瀬中」、これは厠の中。「瀬
話」、悪口ですね。こんな言葉が出ていました。以前、孔海南
さんに話を伺った際、中国では昔便所の側で豚を飼って、排
泄物を食べさせたということを聞きました。瀬と豚という字
は、関係があるのでしょうかね。

下水、その他

『小待蜘蛛と下水で日をくらし』

「小待」は旗本屋敷で使い走りをしていた少年です。刀は差しているが、遊び盛りの子供なので、おそらく溝をのぞいて、蜘蛛をからかったりして、遊び暮らしているということでしょう。この川柳で「下水」という言葉が使われています。

以上の他に下水を扱ったのではないかと思つたものを拾ひ出してみました。

『三千の化粧流るる水道尻』

「三千」というのは吉原の遊女の数です。「水道尻」は吉原の中の町の一番外れにあつた堀に面した所をこのように言いました。「水吐尻」あるいは「水戸尻」と書く説もあります。上水道の末端という説もありますが、水を吐くということから下水を意味するといふ説もあります。結局先ほど言いました「お齒黒どぶ」のことだろうと思ひます。

『大門を口といふので水道尻』

大門口といふのは吉原の出入り口です。出入り口は大門しか無かつたんです。口と尻を引つ掛けた面白さでしょうか。

『正月の真中にある五丁町』

普通門松は玄関の前に立てるのですが、吉原の五丁町は真

中に溝が流れていたので、溝を背にして家の方に向けて門松を立てていたそうです。

『泥水でお玉いけなく成つてゐる』

お玉というのはお玉が池、現在の神田岩本町、昭和通りとJ R神田駅との中間位でしょうか、今もお玉稻荷という祠があります。お玉は茶屋の女で、泥水稼業を引つ掛けたんでしょう。お玉が池に付近の下水が流れ込んでいたんでしょうね。

『藍染めた川も今ではどぶ鼠』

神田駅の南口から昭和通りの方向に藍染川という川が流れていたので。

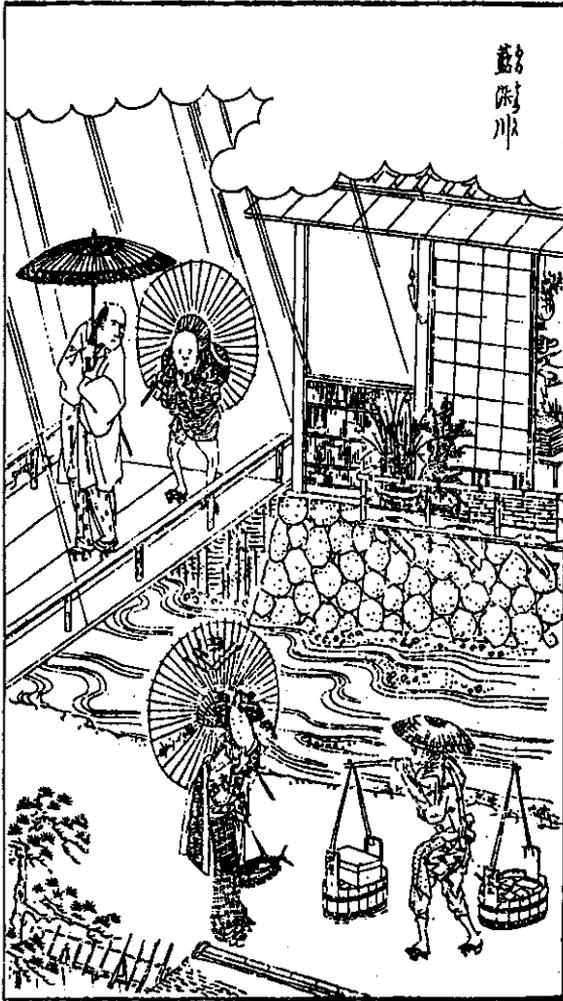
『紺屋町藍染川は裏地なり』

これは着物の裏地と街の裏地を引つ掛けたものです。紺屋町という町名は今でも残っています。藍染川で染めたものを洗つたのでしょうか。私はこのような川が下水の役割も果たしていたのだらうと思ひます。例えば上野町の¹沽券²函³を見ますと、上野の山の下から三味線堀の方に流れていた忍川という川に「御公儀下水」といふ言葉が書かれていました。だからそんなことも感ずるんです。

『どぶの坊ほどは花屋も活けるなり』

池の坊という華道の流派があります。それほどではないが、花屋だから曲がりなりに花が活けられる、池まで行かないどぶぐらいには……。こんな意味だと思ひます。

こんなことから、どぶ等も江戸市民にはかなり関心が持たれていたと言えるような気がします。今はそれほど下水について関心が持たれないというのは、下水が目に見えないからではないかと思えます。江戸の頃には溝（どぶ）があちこち走っていたので、案外身近に溝というものがあつたのではな
いかと思います。



図一五 江戸名所図会に描れた藍染川

『歌がるたとふとふ下女はどぶをくい』
この「どぶを食う」という意味が分からない。感じとしては百人一首かカルタをやっている、一番びりつけつになったということかなと思えますが、でもそれでは川柳として面白くない。何か違った意味があるのでしょうか。ご意見を聞かせて下さい。図一五は藍染川、江戸名所図会に載っているもの

です。こんな様子だったようですね。

個人の便所

今までは下水にちなんだものでしたが、便所に関連したものを幾つか紹介しましょう。今でこそ水洗便所が下水道に繋がっていますので、便所と下水道が切っても切れない重要な関係を持つようになっていますが、江戸時代は違います。でも汚濁物の問題を考えるためには便所のことでも大切です。

「小便に起きて女房基を叱り」

「せっちんでかかあどのやと手じやうよび」

江戸の町の便所という長屋の共同便所を思い出しますが、普通の家には便所があったんだということが分かります。凶

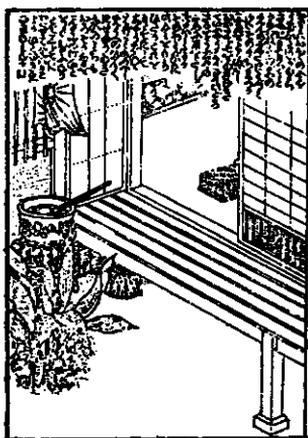


図-6 家の中の便所

一六ですが、家の中の便所の様子が描かれています。この絵は、「江戸かわや図絵」という本に載っていたものです。家にくっついて便所が作られていたことが分かります。

家の中の便所については、他に

「助言無用と雪隠に居てどなり」

「掛取が帰ると手洗鉢が鳴り」

「雪隠で聞きや帰る迄待つといふ」

「掛取が帰ると尻をふいて出る」

「雪隠は信濃にまかす十三日」

(信濃は使用人。十三日は媒払い)

「十五夜は手燭ついでに小便し」

「雪隠へものを言ふのは急なこと」

といった句があります。

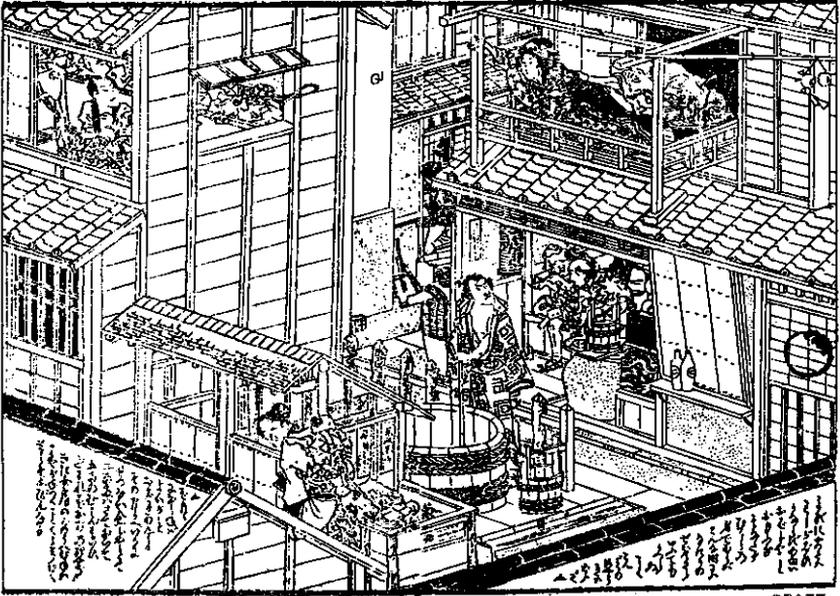
長屋の共同便所

「大家様極く信心な雪隠神」

「よけの歌大屋の内儀持ちあるき」

これは長屋の共同便所。大変汚れ易いので大屋さんが掃除したり、監督をしたりしていたんです。これにも小断があります。よく汚れるので大屋さんが見張っていたら、ある男が出てきた。捕まえて押し問答になった。

大屋さん「お前さんが汚したんじゃないと言うんなら、なん



図一七 長屋の共同便所

でここで湯気が出ているんだ」

男「今朝は冷や飯を食ったから湯気などでねえやい。」

こんな嘸。ともかく大屋さんが管理をしていたことが知れます。

「よけの歌」というのは虫よけの歌。これを書いたものを逆さにして流しや便所に張っておくと、蛆虫が湧いたりしない。そんな俗信があったんです。

「燈明のある雪隠へ度度隠れ」

昔、大晦日には一晩中便所に燈をともしていたと言うんです。普段は暗かったのかもしれない。何故そんなことをするのかと探ってみました。よくは分かりませんでした。でも大変興味をそそられます。

「小便所震へて替る冬の月」

図一七ですが、長屋の共同便所を描いたものです。左下に傾いた屋根が描かれていますが、これが便所。この絵では分らないんですが、このような便所の脇に小便だけをする場所が描かれている絵を見ることがあります。雪隠には大便はもちろんですが、小便専用のものもあつたんです。

図一七には、お稲荷さんは描かれていませんが、長屋の共同便所の近くにお稲荷さんが祀られていることがよくあつたようです。

「たれちらす所へ稲荷を勧請し」



図-8 妓楼の便所 左・小便所 正面・大便所

という句があります。他にも

「雪隠へ行けば両方咳払い」

「閨月雪隠の屋根箸だらけ」

(子供がやたらと生れないための呪い?)

「雪隠へ行くを宿下り苦勞にし」

(奉公先の便所はきれいだが)

「通ふ神雪隠神と仲が良し」

(遊女からの手紙を読む所)

「雪隠でぶどう一トふさ御用喰ひ」

「子卸しや稽古浄瑠璃見てはたれ」

(便所に貼られた広告)

「小便所流すつもりに先きまり」

「雪隠に有る名の娘すこいもの」

「後架まで上下で行く年男」

「雪隠はしごくの文のよみどころ」

「蛸せつちんへ行きどの足でまたごう」

「雪隠へ先を越されて月をほめ」

といった句もあります。

妓楼の便所

「天狗の鼻を杉でつく小便所」

図一八の左に桶のようなものが見えますが、これが小便所

らしいです。「天狗の鼻」は陰茎です。桶の中に杉の葉を入れて、臭い消しと、防音に役立てていた。

「杉の葉へたれる娘は金に成り」

この川柳でも杉の葉が出ています。

妓楼の中の便所を描いたものに、次のような句もあります。

「小便所のつべらぼうの下駄へ乗り」

「小便所丸行燈を片見掛け」

「小便所めんぼくもない人にあひ」

「小便所先をこされて月をほめ」

「酒盛に雪隠さして落ち給ふ」

街頭の共同便所

図一九を見て下さい。これは都立中央図書館の浮世絵のフィルムの中から見付けたものです。町の中の共同便所です。

「俄雨雪隠でかごよぼつてる」

長屋の共同便所や自分の家の便所から駕籠を呼ぶというのは、不自然でおかしいと思つていたんです。だから町の中に共同便所があったのかなと思つていたんです。そしたら図一九のような絵が出てきたわけです。図一十には橋の袂に作られた廁が描かれています。このような廁が町の所々、あるいは人の多く出る所に作られていたような気がします。

「耳袋」（東洋文庫）という本にこんな話がありました。あ

る人が浅草の並木という所の茶屋で休んでいて便所に入ったところがお金の入った紙袋を落としてしまった。その中には印形とかかなりのお金が入っていた。そこで丸裸になって便壺に入つて探していた。そしたら女の人が入ってきた。その女の人は便所の中から手が出てきて、驚いて気絶した。ろくでもない話ですが、そんな話が記録されていました。でもこの話でも分かりますが、人の大勢出る場所には共同便所が作られていたんですね。

便所の無い所ではどうだったか？

「飛鳥山さて雪隠にこまる所」

「丸の内尻へ手をあてまごくし」

「大名小路こまる小便」

「小便の致所もなき花の江戸」

「大江戸でちと不自由な小便所」

「通俗の小便無用鳥井なり」

「雨宿そこじや小便なりませぬ」

「小便をそつぼうへするきつゝい風」

「江戸の土小便臭ひ燕の巢」

「江戸を見よ小便などはたれ流し」

ということになります。



図-9 「共同便所」 「江戸名所道外畫廿八・ごみ坂の景(都立中央図書館蔵)」



図-11 小便担桶 (京都)

『くそ船へ妹を乗せてせなあ来る』
 「せなあ」というのは農村の若者のことです。妹を乗せて江戸に来るといふのは、下女奉公に上がる妹を送って来たのでしょうか。ともかく糞船があつて、江戸の糞尿を農村に運んでいたんです。

『肥取りへ尻がふえたと大家言い』

大家さんは肥し代を肥取りから貰っていたんです。人数が増えたから肥し代も増やせという訳でしょう。

『家主は店子の尻で餅を搗き』

『店中の尻で大屋は餅をつき』

という句もあります。肥取りについての句には他に『光陰矢の如し雪隠もふ溜り』

糞尿運搬船

於切船

肥料としての糞尿の、生産地である農村から農村へは、駄馬によるものと、船船によるものがあり、駄馬によるものは別に記して、ここでは船船によるもの、その船船の名称を主として記述する。和船についての資料的性質を持つ『和漢船用表』(明治三年)の第五に、芥船・糞船の章がある。

『芥船』在船をいふ、船名も仕切あるの名なり、此ゆへに芥船とも云、在船村、に用る者、又、瀬州に下流舟の舟あり。江戸地方に於て(へしるこけし)と名づけられた船は、

下流舟の運搬する肥料のことであつた。

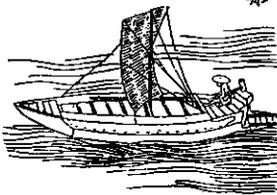


図-12 糞船 (部切船)

「こい取と言ふなあの内儀の兄だ」
 「へつっつの隅へこい取火をもらひ」
 「こい取ろに大屋子守をあつらへる」
 といった句があります。

天水桶

図一十三は天水桶。これは廂や雨樋に多少関係があるので、下水とも無縁でもないでしょう。

「行かぬかと天水桶へ指をさし」

「田甫道天水桶を的に行き」

吉原の妓楼の屋根の上に天水桶が作られていた。

「三ツ布団天水桶の下へしき」

「三ツ布団」は客が遊女に贈る三枚重ねの布団なんです。

「馬喰町天水桶へたれられる」

小便担桶と間違えられたんでしよう。

図一十四は馬喰町です。江戸名所図会に載っているものです。左側の家の軒先に天水桶のようなものがあります。江戸時代には街の中にも防火用に井戸が掘られていたようです。図一十五は「浮世床」の挿絵ですが、屋根から桶で雨水を天水桶に導くようになっていたことが良く分かると思えます。

樋竹

「樋竹のはずれるように乳母はたれ」

「樋竹」ということから樋に竹を使っていたことが分かります。図一十六を見て下さい。樋に竹が使われています。

深川の江戸資料館に樋竹売りが秋になると樋竹を売り歩いたという説明が書かれた絵を見たことがあります。浮世絵などにはほとんど樋など描かれていませんが、無かつたのではなくて省略したのでしよう。

◇川柳を引用した本

誹風柳多留(一、五)	岩波文庫
誹風柳多留拾遺(上下)	岩波文庫
初代川柳選句集(上下)	岩波文庫
誹諧武玉川(一、四)	岩波文庫
江戸川柳辞典	東京堂出版
江戸文学俗信辞典	東京堂出版
川柳大辞典(上下)	高橋書店
江戸川柳・小便	牧野出版
川柳年中行事	春陽堂
江戸かわや図絵	太平書屋



図-13 吉原妓楼の天水桶

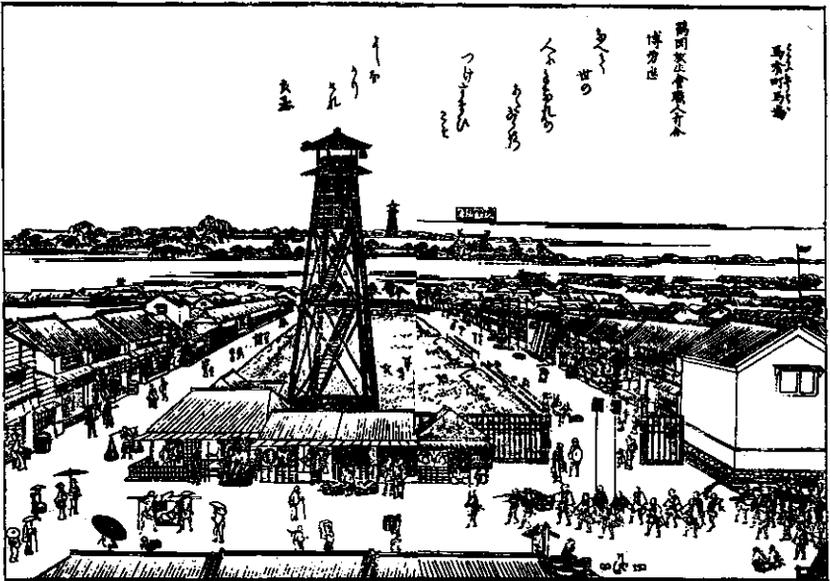


図-14 左側の家の前に「天水桶」



图-15 天水桶

討論

稲場 大変な労作だと思えます。恐らくこのようなことを川柳を通して研究されたのは日本でも数少ないでしょう。参考にされた文献は十冊。それから該当する川柳を探し出して考察されたわけですが。

栗田 実は「江戸川柳・小便」という本があります。比較的新しい本で、小便に関する川柳だけを拾い出したものなんです。少し参考にしました。著者はお医者様でしたね。

中西 大変な作品で、感服しています。図一十三を見ると天水桶が屋根の上にあります。この理由は。

栗田 やはり防火用ということでしょう。守貞漫稿には「江戸の家作のこと」という項に「享保の中頃までは諸侯大夫の戸の門、表長屋の屋根は厚さ五寸、七寸のこけら葺き、棟には瓦を置き、烏飛という木を渡し、井筒に天水桶を入れ、火叩きを添え、屋根の上に置く」ということが書かれています。防火用ですね。

斎藤 「割下水通り」ですが、これは「割下水通り」と通りの名前ととらないで、「割下水を通って」というように解釈しても良いように思います。大変面白く拝聴しました。

熊井 図一十四、十五の天水桶の上に手桶が乗っていませんね。手桶が重ねてあるのが普通かと思っていたのですが。そ

れと図一十一、案内昔田舎では平気でこうしていたんですよ。手桶なんてなくても。町の中でも同じだったんですね。

谷口 図一十六には溝が描かれていますね。大変珍しいものですね。この前佃島の方に行きました。そしたら昔の長屋そのままのものが残っていました。露地の真ん中の溝の部分はコンクリートの蓋がしてありましたが、木の蓋に変えたと江戸の町のようにした。まだ、残っているんですね。蓋は明暦の大火以降にお触れが出て、付けられるようになったらしいですね。それまで随分溝に落ちたらしい。

須藤 江戸の町には随分身近に溝があった。今は目に見えないようになっていく。この辺り興味深いですね。それから臭いですね。臭いに関する川柳はありましたか。

栗田 江戸の下水道は合流式ではないんです。つまり糞尿は分離されている。だからそれほど酷い臭いはなかったんじゃないかと思えます。でも臭くて汚かったと書かれている人もおります。「耳袋」の中にこんな話が載っていました。屋敷長屋の下で三人の商人が話していた。甘酒屋さんと御蕎麦屋さんと田楽屋さん。「田楽が残ったから食べるか」と言うと、「そんな汚いもの食えない」と蕎麦屋が答える。蕎麦屋は、自分では箸や井を小便を垂れるような溝の中の綺麗な所で洗って出していた。だから中身を知ったら汚くて食えないと言っんです。そんな話なんですね。箸や井を洗うくらいだから案内

綺麗だったんじゃないかと思ひます。

須藤 小便桶の杉の葉ですが、現在でも音を消したり臭いを消したりするのに料亭等で使われていますよ。

渡辺 私もそんな所を知っています。今でもありますよ。私の千葉の田舎では町に汲み取りに行く時は杉の葉を持っていき、帰りはその杉の葉を肥担桶の上に乗せて戻ってきたものでした。ところで「どぶへ手を入れてかっぱ」の「かっぱ」ですが、寿司でかっぱというのがありますね。何故そういうのかと調べてみたんですが、かっぱはキユウリが好きだということ、川祭りにキユウリを供えた。これがキユウリをかっぱと言ふ由縁だそうです。そんな事を思い出しました。

藤森 信州の私の田舎でも杉の葉が入れています。青々とした奴です。

渡辺 高野山へ行つたとき、一番偉い高僧が使う小便桶を見る機会がありました。本当の手水（ちようず）だそうです。

栓の大きい器で、その中に杉の葉が一杯盛つてありました。そこにまた栓の桶を置いて柄杓で手を洗うんです。杉の葉は清めにも関係あるのではないのでしょうか。

藤森 私はお清めということを知りました。それから「どぶをくい」というのは、かるたをやるときに何か賭けていたんじゃないでしょうか。びりになると賭けた何かをやらねばならない。そんなことかと思ひますが、それからか

ばは真正正銘のかっぱじゃないのでしょうか。

石丸 「かっぱ」はキユウリでしょうね。どぶ漬けという漬物があるんです。糠漬けのことです。これを「どぶへ手を入れ」と掛けているんだと思ひますね。私、最近本所の方に引越しましてね。川柳の宝庫のような所なんです。

感想ですが、「江戸の土小便臭ひ燕の巢」という川柳があります。随分土壤汚染があつたのではないか。「東京となれど小便たればなし」というのもあります。東京となつてもやはり同じだった。江戸時代、現在とは違つて下水や便所が目に見えた。隠してないんですね。川柳やいろいろな絵からそのこととはつきりしている。現在の感覚と江戸時代の感覚とは違つていたように思ひます。図一十一のようなことは今では下品だ下劣だ思つて、とても考えられませんが、しかし、当時の人々は屎尿も生活の目に見える範囲の一部分であつた世界で生活していただと思ひました。

北川 川柳の中で大小便に関するものは率として相当あるんですか。それから大きい溝の管理を類推できる川柳はありましたか。

栗田 率的には相当あるようです。岩波文庫の「排風柳多留」は五冊なんですが、これは柳多留の二十四編までのようです。ところが百六十五編まであるんですね。だから私が見ていないものが沢山あるんです。相当あるでしょうね。

それから管理ですが、「御府内備考」に誰が下水を管理しているかが書かれています。その本では管理者は様々でしたね。川柳では特に気が付きませんでした。

上ノ土 江戸時代の川柳といいながら現代にも通ずるものが随分多いと感じました。感覚的にですね。もう時代を越えています。諺なんかも時代を越えたものがありますが、川柳でも同じことを感じました。

稲場 川柳や浮世絵を通して当時の生活に溶け込んだ文化を再現する栗田さんの手法は素晴らしいと思います。